

論文の内容の要旨

論文題目 成人日本語学習者の関係節の構造的曖昧性構文における処理について
ーモンゴル語 - 中国語モノリンガル及びバイリンガルの日本語学習者を中心にー

氏 名 白 春花

日常のコミュニケーションの中で、文を理解する初期の段階には構造的選択肢がいくつもあ
るにもかかわらず、われわれは高速かつ効率的に正しい解釈に到達できる。このような、高速か
つ効率的に正しい解釈に到達できるということは、部分的にしか与えられなかった情報の中で、
Parser はいくつもの候補の中からある解釈のみをあらかじめ優先的に選好する傾向が存在する
ことを示している。そして、このような選好性を生み出すような処理を具体的に動かす情報を特
定し、関与する情報やその重み付けを特定することで、人間の文理解メカニズムとはどのような
ものなのかという、文理解研究の中心的な課題に迫ることができる。このような選好性を生み出
す仕組みを明らかにすることにあたり、本研究は、関係節の構造的曖昧性構文における主要部選
好性 (1) に着眼し、次の3点を中心に質問紙調査、自己ペース読み課題と事象関連電位を用い
た実験を行い、言語処理メカニズムの解明に貢献することを目的とする。

- 1) 関係節の主要部後置型言語の中でも、処理選好性における相違が見られるか。さらに、
オンライン処理プロセスにおいて、どの段階で主要部の選好性が行われ、それがなぜそのような
選好性になっているのか。
- 2) 全体的曖昧性によるコスト上の優越性が関係節の主要部後置言語でも見られるか、見
られるなら、その原因は英語のような西欧言語と仕組みに相違があるだろうか。
- 3) L2 及び L3 文処理における既習言語の L1 あるいは L2 の処理選好性の影響がどうなっ

ているのか。

(1) 誰かが [RC バルコニーに立っていた] 女優の召使をうった。

まず、RC“バルコニーに立っていた”が入力された時点では、関係代名詞がなく、かつ主要部の候補もまだ入力されていない。そのため、この時点では、先行節が関係節であることか否かを判断できない。その後、最初の名詞句“女優”が入力され、それ以前に処理された要素が関係節であったことが初めて明示的に示される。また、この時点では“女優”が関係節の唯一の主要部として解釈される。しかし、さらなる名詞句が後続することが、“女優”に伴う所有格「の」の情報から予測可能である。つづいて、次の名詞句“召使”が入力される。それによって、関係節の主要部解釈には曖昧性が生じる。つまり、どちらの名詞句を主要部として解釈されることも可能になるのである。しかし、図1が示すように、後者の“召使”が主要部として parser に解釈された場合は、最初の名詞句が入力された時点ですでに成立されている構造“女優がバルコニーに立っている”という構造、つまり、節点 RC と節点“女優の”の NP が一つの NP に支配されている構造が崩される。

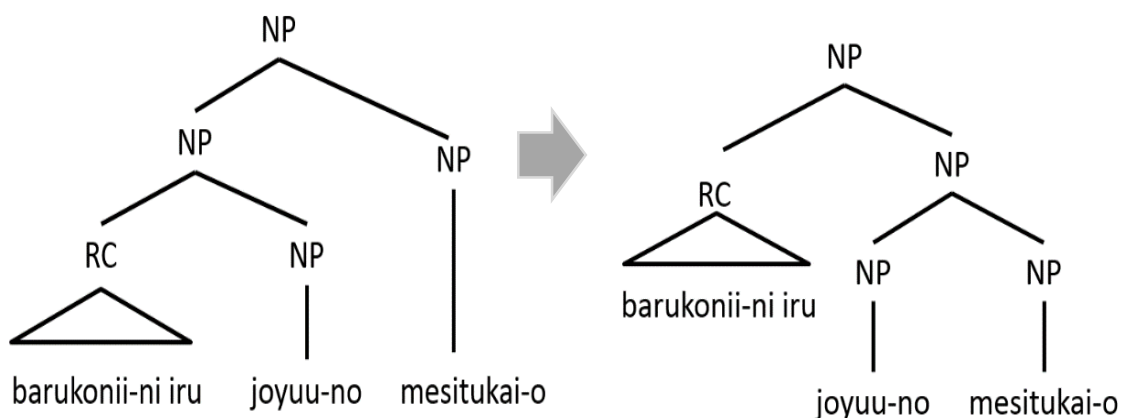


図1 NP2 が主要部と解釈された際の日本語の関係節構文の構造

結果として、“召使”が関係節の主要部として更新され、節点 RC が二つの名詞句、つまり“女優の”及び“召使を”を支配する NP と姉妹関係を作ることが考えられる。言い換えると、RC が“召使”を修飾しようとする、“バルコニーにいる女優”の構造自体が崩され、RC が“女優”から“召使”を修飾するような再解析が生じているということである。このように関係節の主要部前置言語と後置言語では構造が異なることにより、情報の入力順序およびその処理プロセスも異なるものとなっているため、日本語などの関係節の主要部後置型言語における関係節の構造的曖昧性文を処理する特徴を明らかにすることは、1) 関係節とその主要部名詞の関係を逐次的に処理するにあたって構造の再解析が自から必要とされるような主要部後置言語の検討により、実時

間処理という観点から得られる知見は大きい；2）英語のような関係節主要部前置型言語を中心に提案された様々な仮説の有効性や普遍性を検討できる；3）文処理における言語の統語的な特徴の影響のあり方を明らかにし、人間の文処理メカニズムをコントロールしている制約と原理を説明する上で非常に重要だといえる。

関係節の主要部後置言語における日本語、モンゴル語、中国語、トルコ語を中心に、まず、1）最終的な選好性において言語間の相違が存在するか、質問紙調査を用いて調べた；2）オンライン処理プロセスにおいて、どの段階で主要部の選好性が行われ、それがなぜそのような選好性になっているのか；3）それに加え、全体的曖昧性のある文と一時的な曖昧性構文における処理負荷に相違があるか、自己ペース読み課題及び事象関連電位を用いて調べた。その後、上述の内容で得られた結果を踏まえ、第二言語学習者及び第三言語学習者のターゲット言語の文処理における既習言語の影響を1）と2）と同様な研究手法を用いて調べた。

第一に、最終的な主要部選好性の側面から L1 処理、L2、L3 処理に沿ってまとめる。まず、L1 文処理において、日本語母語話者は関係節を NP2 に解釈する傾向を持つが、トルコ語及び中国語母語話者の場合、関係節を NP1 に解釈する選好性を持つことが分かった。そして、モンゴル語母語話者は、日本語母語話者と同じく、関係節を最終的に NP2 に解釈する傾向を持つことが分かった。モンゴル語の関係節の構造的曖昧性構文において、今回はじめて実証データで示すものとなり、文処理研究において新たな知見を加えたことと考えられる。また、L2 学習者の文処理においては、日本語の関係節の構造的曖昧性構文において、モンゴル語母語話者の日本語学習者は日本語母語話者と同じく NP2 解釈の選好性を持つことに対し、中国語及びトルコ語母語話者の日本語学習者はそれぞれの L1 母語と類似した選好性で、NP1 解釈の選好性を持つことが分かった。結果として、質問紙調査において、L2 文処理における L1 の影響が確認された。そして、L3 学習者の文処理においては、日本語の関係節の構造的曖昧性構文において、モンゴル語—中国語バイリンガル話者は NP2 を多く選択し、NP2 解釈が示されたが、その選択率がモンゴル語母語話者の日本語学習者に比べ統計的に有意に低く、一方、中国語母語話者の日本語学習者の選択率に比べ統計的に有意に高かった。この結果より、L3 文処理における L1、L2 の影響がともに確認され、かつそれがターゲット言語と既習言語の処理特徴上の類似性及び統語構造上の類似度に関係している可能性も示唆された。つまり、ターゲット言語と既習言語で、統語構造上類似した言語で処理特徴が一致すれば、その言語の影響が強い可能性が示された。L3 文処理における結果は文処理及び言語間の処理特徴の類似度の関係を示唆するものだけではなく、L3 文処理研究に新たな方向性を加えることになった。

第二に、関係節の構造的曖昧性構文におけるオンライン処理の側面から、L1 処理、L2、L3 処

理に沿ってまとめる。まず、日本語の関係節の構造的曖昧性構文において、初期の NP2 解釈が今回の事象関連電位を用いた実験で確認された。一方、読み時間を指標とした先行研究では示唆されていた結果、つまり、最終的には NP2 の解釈が成立することは、本研究における自己ベース読み課題では確認されなかった。それから、中国語及びトルコ語母語話者を対象としたオンライン実験では、それぞれ、先行研究の結果を一定の範囲で再現するものとなった。つまり、関係節の構造的曖昧性構文において、両グループともに関係節を NP1 に解釈する傾向、つまり NP1 解釈の選好性をもつことが確認された。そして、全体的曖昧性構文における処理負荷の優越性が確認されておらず、むしろ、日本語及び中国語のデータのみをみれば、全体的曖昧性のある構文が一時的な曖昧性構文に比べ、処理コストが高いことが示唆された。これは、いままでの関係節の主要部前置言語を対象とした研究の結果と異なる結果である。そして、関係節の主要部後置言語を対象とする研究の中でも、はじめて示された結果である。その背景仕組みについて、論文の中で詳細な考察を行っている。次に、L2 文処理において、今回のオンライン実験では、トルコ語母語話者の日本語学習者のデータから L2 学習者がターゲット言語の処理に類似する処理プロセスが確認された。一方、中国語母語話者の日本語学習者は、母語、目標言語の L1 処理のいずれとも異なる結果が得られた。二つの学習者グループで得られた結果をあわせると、今回の L2 文処理のデータでは、学習者特有の処理プロセスがある可能性も示唆された。最後に L3 文処理において、バイリンガルの学習者を対象としたデータでは、読み時間に注目するかぎり L3 の日本語の関係節の構造的曖昧性構文において、L2 学習者と類似する結果が得られたが、パターンに注目すると、L2 と異なる処理を行っている可能性が示された。